

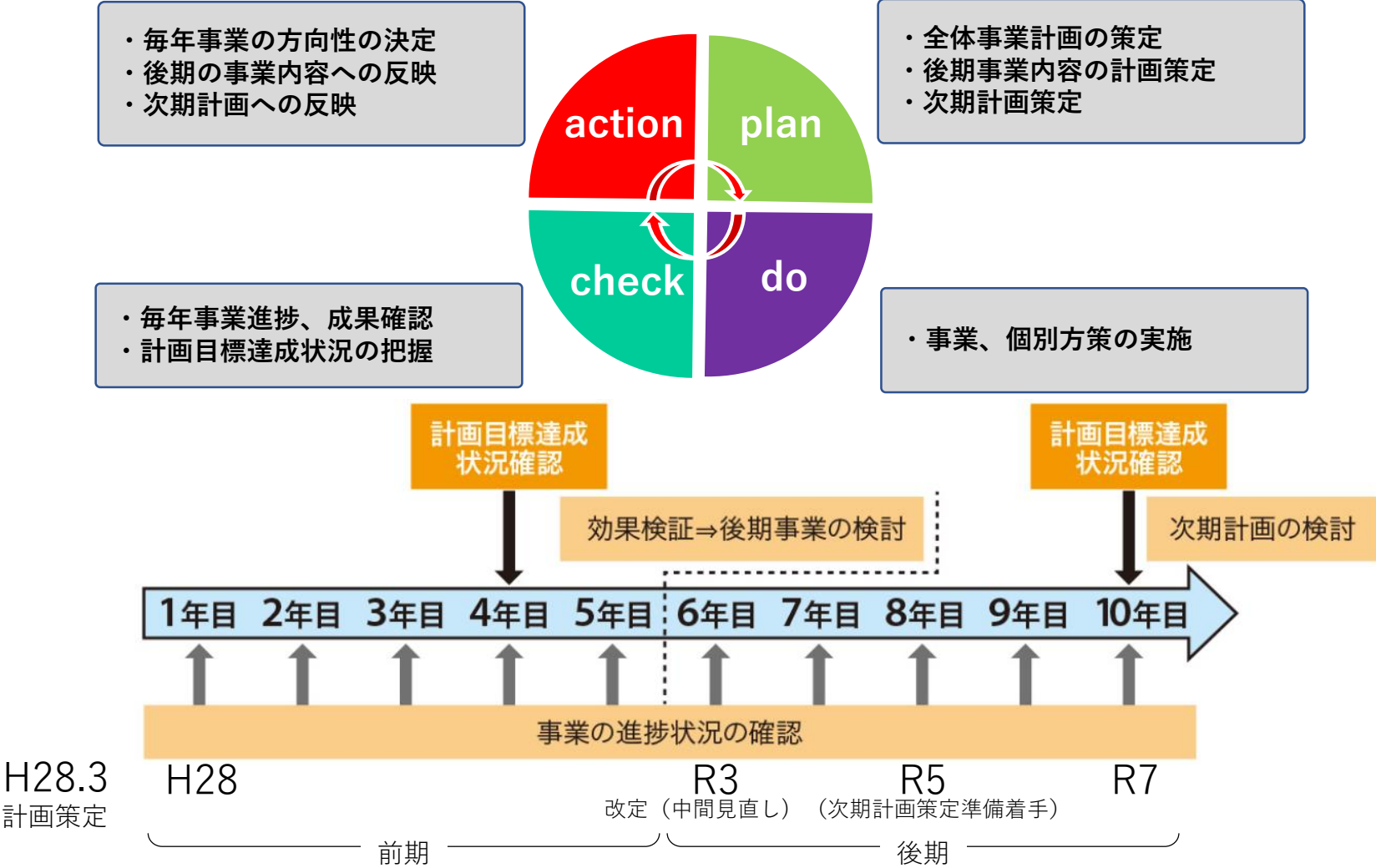
さいたまはーとの改正について （前回会議までのふりかえりと今回会議での議題）

**令和7年度第1回
さいたまはーと推進協議会**

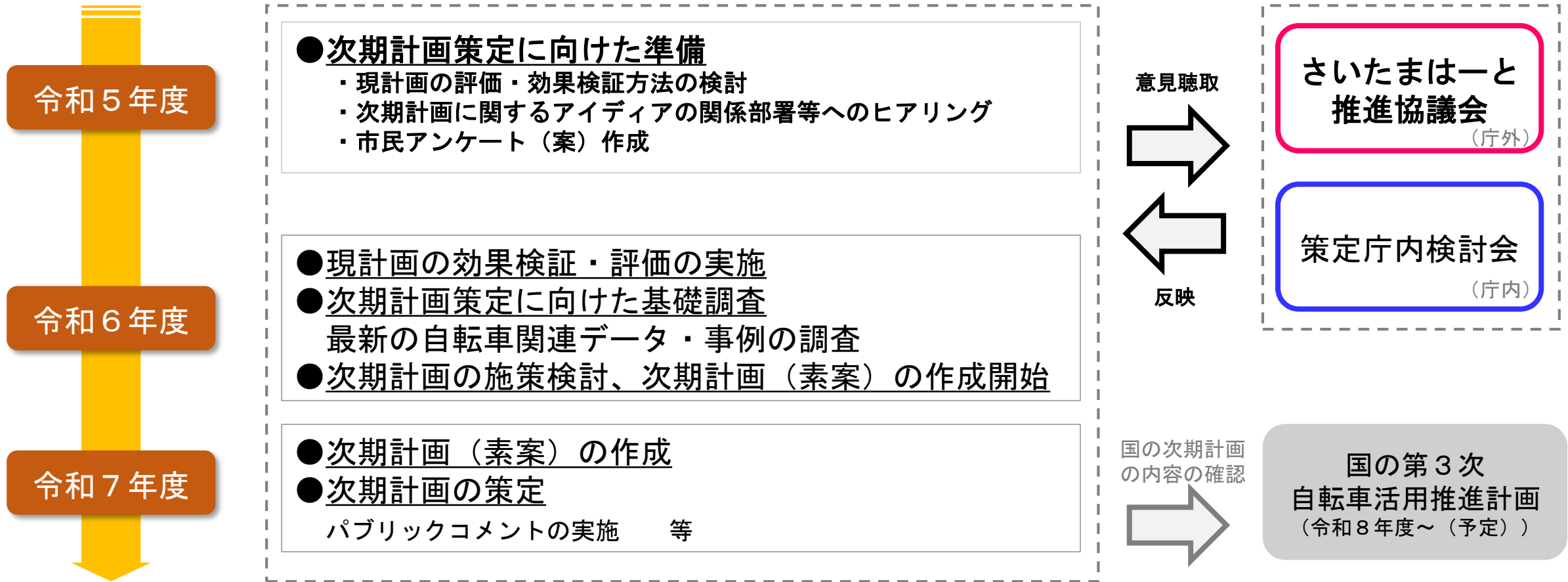
計画の推進方法

- P D C Aサイクルにより、毎年の進捗状況や、前期・後期5年間毎の事業成果や目標達成状況の確認を行い、社会情勢の変化も踏まえた事業内容の見直しと次期計画への反映を実施

P D C Aサイクルによる進捗管理



次期計画策定の進め方（体制）



さいたま自転車まちづくりプラン～さいたまはーと～
計画期間（予定）：令和8年度～令和17年度の10年間

次期計画策定の進め方（検証方法）

<計画に反映する事項>

自転車利用環境の変化

本プランの策定時と比較し、自転車の利用状況や環境の変化を検証。

- 主な検証項目
- ・自転車を取り巻く社会環境の変化
 - ・自転車の利用や事故の変化
 - ・サイクリングやシェアサイクルの状況

各施策の効果検証

各施策の進捗状況を把握するとともに、施策を展開することによる効果等の検証を実施。

- 主な検証項目
- ・施策の実施状況
 - ・成果指標の達成状況
 - ・課題や改善内容

市民アンケートの実施

- 期 間 令和6年第2四半期実施
○対象者 前回実績より、市内在住
6,000人へ配布を想定
(無作為抽出、郵送)

- 主なアンケート項目
- ・自転車利用環境の満足度
 - ・実施中・新たな施策に対する重要度など

【将来像】人と環境にやさしい 安全で元気な自転車のまち さいたま

【計画目標】 自転車利用者増加、自転車事故減少、市民満足度向上

【施策】・現行施策の実施方針検討（拡大、継続、統合・縮小）
・新たな施策検討

たのしむ

国際的なサイクルレース、サイクリングや観光周遊の利用環境の充実

まもる

交通安全教育の質の向上、継続的な実施、災害等の非常時の対応への備え

はしる

自転車通行環境の充実、通勤・健康増進等、多目的な自転車活用の推進

とめる

駐輪環境の充実、公共交通との連携強化、シェアサイクルの充実、IoT技術の活用

第2次さいたま自転車まちづくりプラン
～さいたまはーと～
(計画期間：令和8年度～令和17年度)

<整合を図る事項>

自転車活用推進計画

国土交通省にて策定した「自転車活用推進計画」及び、令和7年度に改定する本計画の動向を注視。

- 現自転車活用推進計画の特徴
- ・通行空間等の利用環境から、観光、健康、安全まで、幅広い自転車の活用推進を目指す
 - ・自転車関連の最上位の計画として、国、自治体、利用者、事業者の協力・連携が求められている
 - ・現計画は令和7年度まで

自転車まちづくり条例

自転車まちづくりの基本理念や、市・利用者・事業者・市民等の責務の明確化（教育、ヘルメット着用、保険加入等）

さいたま市関連計画

- さいたま市総合振興計画
- さいたまSMARTプラン
- さいたま市地域公共交通計画
- さいたま市都市交通戦略
- など

1 次期計画改定の進め方（検証の流れ）

①改定作業の事前準備

計画目標の評価・分析手法（案）の作成

市民アンケート調査（案）の作成

②現状・課題の整理

1) 自転車利用に関する 情報・データの収集・整理

- ・ 市民アンケート調査の実施
（自転車利用状況・満足度、ニーズ等把握）
- ・ さいたま市の特徴整理（地理、人口構成や推移）
- ・ 国・県の関連法令・条例・計画の整理
- ・ 市の関連条例・計画の整理

（主に整合を図ることが目的）

・ 自転車利用環境の変化

- ・ 全国的な自転車関連行政の動向
（例：国や世界の脱炭素化の推進状況や
自転車施策のトレンドなど）
- ・ 自転車利用状況等のデータ
- ・ 先進事例等の把握

2) 現計画の評価・分析

目 標

（事故件数、自転車利用者数※、市民満足度）

確認・評価、 要因分析

方 策

（活動指標）

確認・評価

（R5年度までの毎年の確認結果の積み上げ）、要因分析

3) 課題の整理

さいたま市の自転車政策における課題整理

③将来像の検証

変更の必要性検証・修正案作成

協議会での意見徴収

④目標の検証

変更の必要性検証・修正案作成

協議会での意見徴収

・ ・ 目標と方策のたたき台提示想定

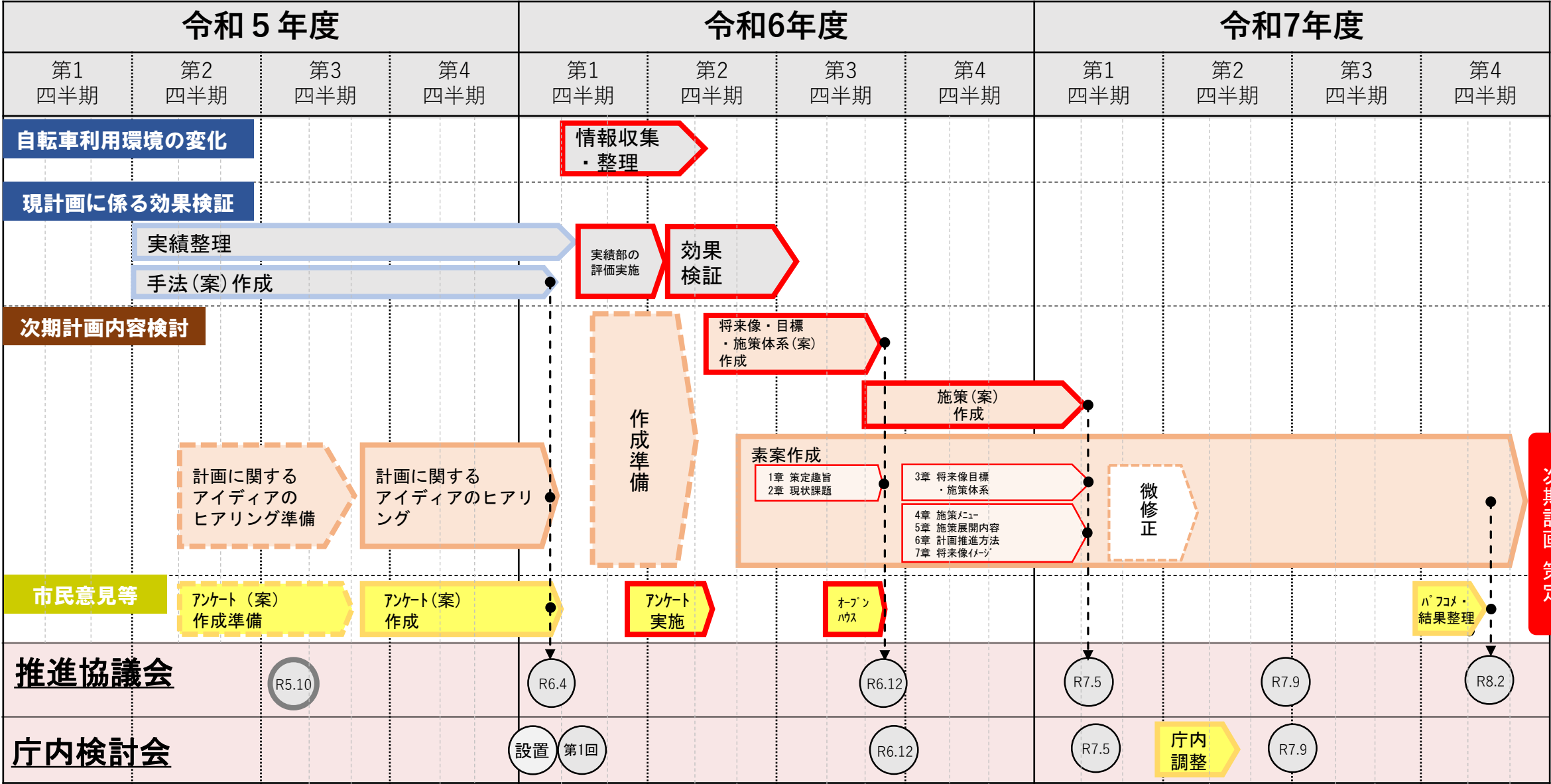
⑤方策の検証

継続・拡大・統合・新規等検討

協議会での意見徴収

今回会議の議題

次期計画策定の進め方（検証スケジュール）



次期計画
策定

前回（令和6年度第2回）協議会での主な意見と対応案

前回協議会での主な意見			対応案
項目		代表的な具体的意見	
1	計画の目標（成果指標）の評価の仕方	・年代別のアンケート回答割合と実際の人口構成比との間に乖離があることから、 <u>補正をかけて成果指標の達成状況を評価すべき。</u>	御意見を踏まえて <u>補正をかけた値により評価</u> する。 （対応案①参照）
2	計画の目標（成果指標）の評価に用いるデータの検討	・成果指標の「自転車の利用」について、アンケートの結果を用いるのではなく、 <u>信頼のおける統計値により設定することが望ましい。</u>	適当な統計値の設定が難しいため、アンケートの結果に <u>補正をかけた値により評価</u> する。 （対応案②参照）
3	年代別の自転車利用者の割合の算出方法	・自転車利用頻度のグラフで、「月4回未満」の割合が全ての年代で10％程度減っており、統計的に見て要因があると思われる。 <u>前回の調査票から回答の仕方（選択形式→数値入力形式）が変わったことでバイアスがかかっているのではないか。その結果、自転車利用者の割合も少なくなっているのであれば、別角度で考えたほうが良いのではないか。</u>	・設問バイアスの影響により、「月4回未満」の割合が減少した可能性が高いものの、利用頻度については、年度ごとに <u>概ね共通の算出方法であり回答の仕方の変更による影響は小さいことを確認</u> （確認結果①参照）
4	自転車に関する交通ルールへの遵守割合の算出し直し	・ルールを「知っているか」「守っているか」の質問において、 <u>自転車を使っていない人はルールを知っていても守れない</u> のではないか。	<u>自転車利用者に絞って遵守割合を算出</u> する。 （対応案③参照）

前回（令和6年度第2回）協議会での主な意見と対応案

前回協議会での主な意見			対応案
項目		代表的な具体的意見	
1	計画の目標（成果指標）の評価の仕方	・年代別のアンケート回答割合と実際の人口構成比との間に乖離があることから、 <u>補正をかけて成果指標の達成状況を評価すべき。</u>	御意見を踏まえて <u>補正をかけた値により評価</u> する。 （対応案①参照）
2	計画の目標（成果指標）の評価に用いるデータの検討	・成果指標の「自転車の利用」について、アンケートの結果を用いるのではなく、 <u>信頼のおける統計値により設定することが望ましい。</u>	適当な統計値の設定が難しいため、アンケートの結果に <u>補正をかけた値により評価</u> する。 （対応案②参照）
3	年代別の自転車利用者の割合の算出方法	・自転車利用頻度のグラフで、「月4回未満」の割合が全ての年代で10％程度減っており、統計的に見て要因があると思われる。 <u>前回の調査票から回答の仕方（選択形式→数値入力形式）が変わったことでバイアスがかかっているのではないか。その結果、自転車利用者の割合も少なくなっているのであれば、別角度で考えたほうが良いのではないか。</u>	・設問バイアスの影響により、「月4回未満」の割合が減少した可能性が高いものの、利用頻度については、年度ごとに <u>概ね共通の算出方法であり回答の仕方の変更による影響は小さいことを確認</u> （確認結果①参照）
4	自転車に関する交通ルールへの遵守割合の算出し直し	・ルールを「知っているか」「守っているか」の質問において、 <u>自転車を使っていない人はルールを知っていても守れない</u> のではないか。	<u>自転車利用者に絞って遵守割合を算出</u> する。 （対応案③参照）

対応案① 【計画の目標（成果指標）の評価の仕方】

補正の方法

- 母集団（住民基本台帳人口）の人口構成比に合わせて、各年代のアンケートのサンプル数に重みづけして集計する「ウェイトバック集計」を実施

<人口構成比でアンケートのサンプル数を補正する手順（令和6年度の場合）>

性別・年代別サンプル数

	さいたま市			合計
	男性	女性	無回答	
10代	13	19	1	33
20代	23	25	2	50
30代	32	69	2	103
40代	59	108	1	168
50代	51	113	4	168
60代	72	99	2	173
70代	49	73	1	123
80代	33	34	2	69
90代	4	2	0	6
無回答	16	29	121	166
合計	352	571	136	1,059

(手順Ⅰ)

実績値								
年代	アンケート				R6.7月住民基本台帳人口			
	サンプル数④		構成比		サンプル数		構成比②	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
10～20代	36	44	4%	5%	139,567	135,264	11%	11%
30～40代	91	177	10%	20%	186,165	177,707	15%	14%
50～60代	123	212	14%	24%	179,356	172,635	14%	14%
70才以上	86	109	10%	12%	106,786	141,120	9%	11%
合計①	878		100%		1,238,600		100%	

手順Ⅰ：性別・年代別のサンプル数に応じて補正を行うカテゴリーを設定

手順Ⅱ：人口構成比で補正したサンプル数を算出
(①×②=③)

手順Ⅲ：補正したサンプル数③を実績のサンプル数④で除して「補正係数」を設定

手順Ⅳ：補正係数を乗じてアンケート結果を補正

	補正係数 (③÷④)	
	男性	女性
10～20代	2.75	2.18
30～40代	1.45	0.71
50～60代	1.03	0.58
70才以上	0.88	0.92
合計		

(手順Ⅳ)

(手順Ⅲ)

(手順Ⅱ)

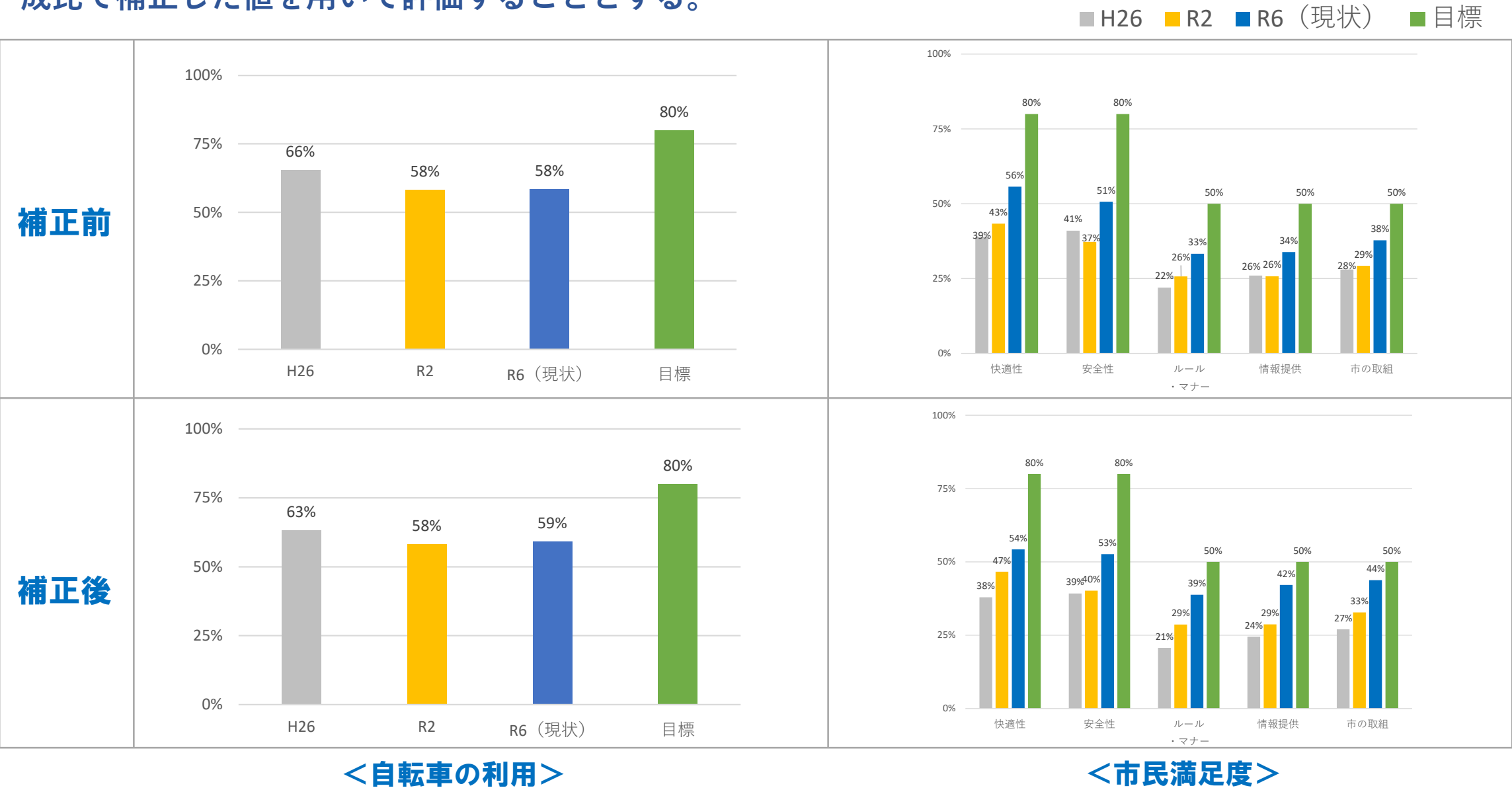
	人口補正サンプル数③ (①×②)	
	男性	女性
10～20代	99	96
30～40代	132	126
50～60代	127	122
70才以上	76	100
合計	878	

(手順Ⅱ)

アンケート項目毎に
補正係数を乗じる

対応案① 【計画の目標（成果指標）の評価の仕方】

- 成果指標のうち「自転車の利用」及び「市民満足度」については、過去のアンケートの結果も含めて人口構成比で補正した値を用いて評価することとする。



前回（令和6年度第2回）協議会での主な意見と対応案

前回協議会での主な意見			対応案
項目		代表的な具体的意見	
1	計画の目標（成果指標）の評価の仕方	・年代別のアンケート回答割合と実際の人口構成比との間に乖離があることから、 <u>補正をかけて成果指標の達成状況を評価すべき。</u>	御意見を踏まえて <u>補正をかけた値により評価</u> する。 （対応案①参照）
2	計画の目標（成果指標）の評価に用いるデータの検討	・成果指標の「自転車の利用」について、アンケートの結果を用いるのではなく、 <u>信頼のおける統計値により設定することが望ましい。</u>	適当な統計値の設定が難しいため、アンケートの結果に <u>補正をかけた値により評価</u> する。 （対応案②参照）
3	年代別の自転車利用者の割合の算出方法	・自転車利用頻度のグラフで、「月4回未満」の割合が全ての年代で10％程度減っており、統計的に見て要因があると思われる。 <u>前回の調査票から回答の仕方（選択形式→数値入力形式）が変わったことでバイアスがかかっているのではないか。その結果、自転車利用者の割合も少なくなっているのであれば、別角度で考えたほうが良いのではないか。</u>	・設問バイアスの影響により、「月4回未満」の割合が減少した可能性が高いものの、利用頻度については、年度ごとに <u>概ね共通の算出方法であり回答の仕方の変更による影響は小さいことを確認</u> （確認結果①参照）
4	自転車に関する交通ルールへの遵守割合の算出し直し	・ルールを「知っているか」「守っているか」の質問において、 <u>自転車を使っていない人はルールを知っていても守れない</u> のではないか。	<u>自転車利用者に絞って遵守割合を算出</u> する。 （対応案③参照）

対応案② 【計画の目標（成果指標）の評価に用いるデータの検討】

- 自転車利用者数を把握できる統計データはあるものの、調査頻度が10年毎であったり、データの精度に課題あったりするなど、成果指標「自転車の利用」の評価に用いるのは難しい面がある。

統計データ名	データの特徴	留意点
東京都市圏パーソントリップ調査データ	・ 代表交通、端末交通、目的別、年齢別等の分析目的に合わせて自転車利用者数（サンプルに占める割合）を把握可能	・ <u>概ね10年に一度調査が実施</u> されるため、計画の見直し等のタイミングで最新のデータを利用できない可能性がある
国勢調査データ	・ 通勤・通学時の徒歩、鉄道・電車、バス、自家用車、自転車等の交通手段の利用割合（代表交通手段分担率）を把握可能	・ 交通手段の調査は、 <u>10年ごとの大規模調査時に実施</u> されるため、計画の見直し等のタイミングで最新のデータを利用できない可能性がある ・ 国勢調査で把握する交通手段は <u>通勤・通学時（15歳以上の自宅外就業者や通学者）に限定</u> される
携帯基地局データ（ビッグデータ）	・ 個人の地点間の移動状況、移動時間を時間帯別、日別等、継続的に把握することが可能	・ 交通手段の判定は <u>地点間移動の速度等で判定するため、データの精度に課題</u> がある ・ 個人情報のため属性等の付随的な分析ができない

⇒ 回収率の向上を図り、人口補正の処理の上で、これまでどおりアンケート調査の結果を用いて評価したい。

統計データ名	データの特徴	留意点
アンケート調査	・ 利用目的、自転車利用頻度、利用距離等、分析目的に合わせた自転車利用状況に関する設問が設定可能	・ 調査実施のため、都度コストが発生 ・ サンプル数が限定されるため、 <u>回収率の向上や人口補正の処理が必要</u>

前回（令和6年度第2回）協議会での主な意見と対応案

前回協議会での主な意見			対応案
項目		代表的な具体的意見	
1	計画の目標（成果指標）の評価の仕方	・年代別のアンケート回答割合と実際の人口構成比との間に乖離があることから、 <u>補正をかけて成果指標の達成状況を評価すべき。</u>	御意見を踏まえて <u>補正をかけた値により評価</u> する。 （対応案①参照）
2	計画の目標（成果指標）の評価に用いるデータの検討	・成果指標の「自転車の利用」について、アンケートの結果を用いるのではなく、 <u>信頼のおける統計値により設定することが望ましい。</u>	適当な統計値の設定が難しいため、アンケートの結果に <u>補正をかけた値により評価</u> する。 （対応案②参照）
3	年代別の自転車利用者の割合の算出方法	・自転車利用頻度のグラフで、「月4回未満」の割合が全ての年代で10％程度減っており、統計的に見て要因があると思われる。 <u>前回の調査票から回答の仕方（選択形式→数値入力形式）が変わったことでバイアスがかかっているのではないか。その結果、自転車利用者の割合も少なくなっているのであれば、別角度で考えたほうが良いのではないか。</u>	・回答の仕方を変えたことで、「月4回未満」の割合が減少した可能性が高いが、自転車利用者の割合については、年度ごとに <u>概ね共通の算出方法であり回答の仕方の変更による影響は小さいことを確認</u> （確認結果①参照）
4	自転車に関する交通ルールへの遵守割合の算出し直し	・ルールを「知っているか」「守っているか」の質問において、 <u>自転車を使っていない人はルールを知っていても守れない</u> のではないか。	<u>自転車利用者に絞って遵守割合を算出</u> する。 （対応案③参照）

確認結果① 【年代別の自転車利用者の割合の算出方法】

- いずれの年度も、「自転車を使わない+自転車を使っている（頻度別）」を母数にして、週1日以上使っている方の割合を算出しており、算出（統計的な処理）方法が自転車利用者の割合に及ぼす影響は小さいと考えられる。

年度	自転車の利用の有無に係る質問の回答選択肢	質問順 自転車の利用頻度に係る質問の回答選択肢	自転車利用者の割合の算出方法（ $\frac{\text{分子}}{\text{分母}}$ ） （成果指標）
H26	A. ほとんど使わない B. 使っている	①週5日以上 ②週3～4日程度 ③週1～2日程度 ④月4日未満	$\frac{(\text{①週5日以上} + \text{②週3～4日程度} + \text{③週1～2日程度})}{(\text{①週5日以上} + \text{②週3～4日程度} + \text{③週1～2日程度} + \text{④月4日未満} + \text{A. ほとんど使わない}) \times 1}$
R2	－（質問の設定なし）	①週5日以上 ②週3～4日程度 ③週1～2日程度 ④月4日未満 ⑤自転車を使わない	$\frac{(\text{①週5日以上} + \text{②週3～4日程度} + \text{③週1～2日程度})}{(\text{①週5日以上} + \text{②週3～4日程度} + \text{③週1～2日程度} + \text{④月4日未満} + \text{⑤自転車を使わない})}$
R6	A. 使っている B. 使っていない（しばらく利用していない方含む）	日/週の自由回答	$\frac{(\text{週1日以上利用})}{(\text{A. 使っている} + \text{B. 使っていない}) \times 1}$

※1 H26及びR6年度において、自転車の利用の有無に係る質問で「使っている」と回答したにも関わらず利用頻度の質問に未回答のサンプルは、母数から除外している。 14

確認結果① 【年代別の自転車利用者の割合の算出方法】

《補足》 全ての年代で「月4回未満」の割合が10%程度減った要因について

- R6年度のアンケートでは、利用日数が多い上位3つの利用目的について、自転車の利用頻度を数値（日/週）で回答してもらう形式を採用し、利用頻度の上位1位の値を抽出して1日/週以上のサンプルを集計している。（上位3つの利用頻度の合計値ではない）

自転車利用に関するアンケート調査票

問4-1 選択した目的のうち、利用回数が多い上位3つについて、自転車の利用日数、目的地までの距離（最も頻度が多いもの）、自転車で行ってもよいと思う距離を教えてください。
※該当する目的の欄のみ記入し、他は空欄で結構です。（以下の問も同様）。

利用目的	利用日数 (日/週)	目的地までの 距離 (km)	行ってもよいと 思う距離 (km)
1 通勤			
2 通学			
3 買物			
4 通院			
5 子供の送迎			
6 食事・交流等その他私用			
7 業務			
8 健康づくり		(実際の走行距離)	(走りたい距離)
9 スポーツ・競技		(実際の走行距離)	(走りたい距離)
10 サイクリング等の趣味		(実際の走行距離)	(走りたい距離)
11 その他			
回答例：1 通勤	5 日	9 km	1 2 km

<パターン①>

通勤 5日/週
買物 1日/週
通院 0.5日/週



週1日以上の利用者
として集計

<パターン②>

通院 0.5日/週
業務 0.5日/週
その他 0.5日/週



合計で1日/週以上
になっても集計
対象外

※H26年度、R2年度は、「自転車利用頻度の設問」
⇒「利用目的（複数回答）」の設問構成になって
おり、目的に依らない自転車の利用頻度をサンプ
ルとして集計している。

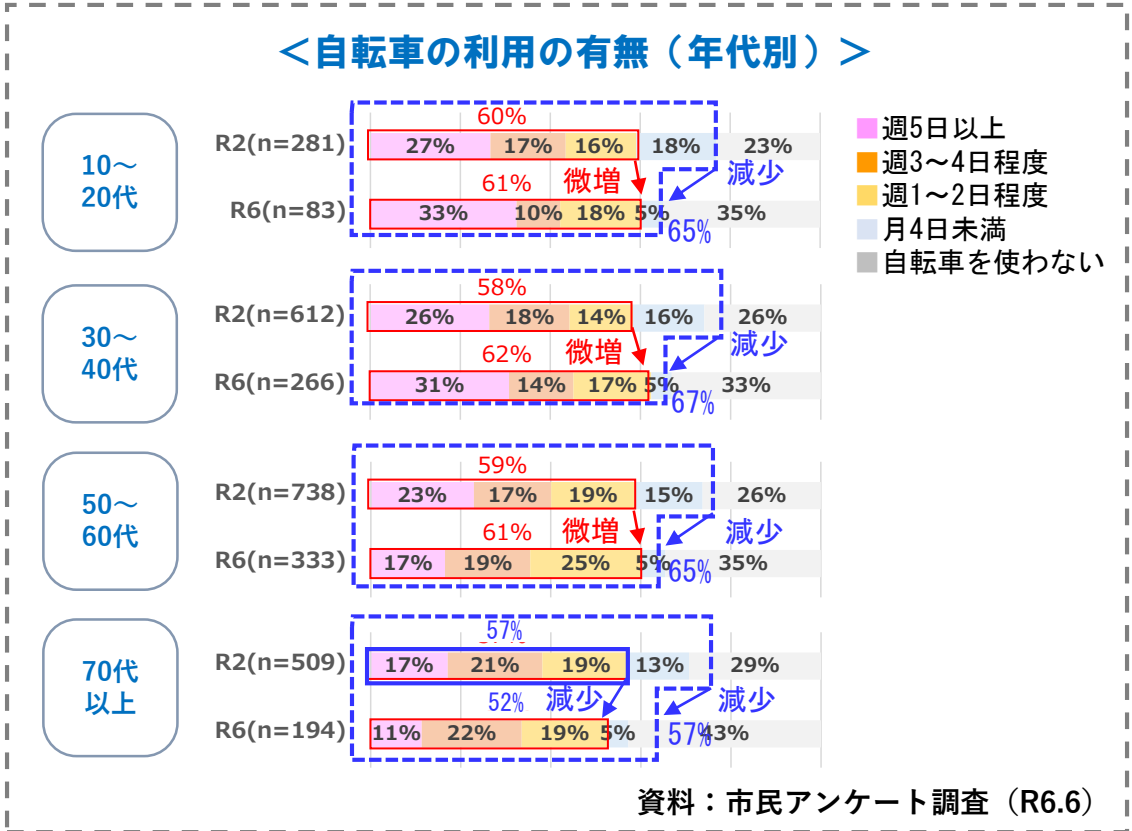
確認結果① 【年代別の自転車利用者の割合の算出方法】

《補足》 全ての年代で「月4回未満」の割合が10%程度減った要因について

- R2年度は、自転車の利用の有無に係る質問を設定せずに利用頻度の質問で「自転車を使わない」という選択肢を設定している。一方、R6年度は、自転車利用の有無に係る質問で「使っていない（しばらく利用していない方含む）」という選択肢を設定し、「使っている」と回答した方に対して利用頻度の質問をしている。
- そのため、R2年度に「月4日未満」と回答した層の一部が、R6年度で「使っていない（しばらく利用していない方含む）」を選択した可能性が考えられる。

年度	自転車の 利用の有無に係る 質問の回答選択肢	質問順 自転車の 利用頻度に係る 質問の回答選択肢
R 2	－（質問の設定なし）	①週5日以上 ②週3～4日程度 ③週1～2日程度 ④月4日未満 ⑤自転車を使わない
R 6	A. 使っている B. 使っていない（しばらく利用していない方含む）	日/週の自由回答

令和6年度第2回協議会資料2の抜粋（一部編集）



確認結果① 【年代別の自転車利用者の割合の算出方法】

《補足》 全ての年代で「月4回未満」の割合が10%程度減った要因について

- 「週1日以上」と「週1日未満」の構成比について、調査年度によって著しい傾向の違いは見られない。
- 「週1日未満」の構成比の内訳について、設問構成が同じH26年度とR6年度は同様の傾向が見られる一方で、R2年度とそれ以外の年度では傾向に違いがあるため、R2年度に「月4日未満」が突出しているのは、設問バイアスによる異常値の可能性が高い。
- なお、H26年度とR6年度で「週5日以上」の構成比に差があるのは、最も多い割合を占める10～20代（通学・通勤利用）の取得サンプル数に差があることが最も大きな要因と考えられる。
（H26年度：29%【811／2,750】、R6年度：8%【83／1,055】）

＜調査年度ごとのアンケートのサンプル数及び構成比＞

	H26		R2		R6	
	サンプル数	構成比	サンプル数	構成比	サンプル数	構成比
週1日以上	週5日以上	900 33%	494 23%	212 20%		
	週3～4日程度	488 66% 18%	390 57% 18%	181 58% 17%		
	週1～2日程度	401 15%	366 17%	213 21%		
	月4日未満	119 4%	326 15%	49 5%		
	自転車を使わない ※1	821 34% 30%	569 43% 27%	381 42% 37%		
合計	2729 100%	2145 100%	1036 100%			
頻度不明 ※2	21 -	0 -	19 -			

※1 H26及びR6年度は、「自転車を使わない」のサンプル数の中に、自転車を「ほとんど使わない（H26）」「しばらく利用していない（R6）」を含む。

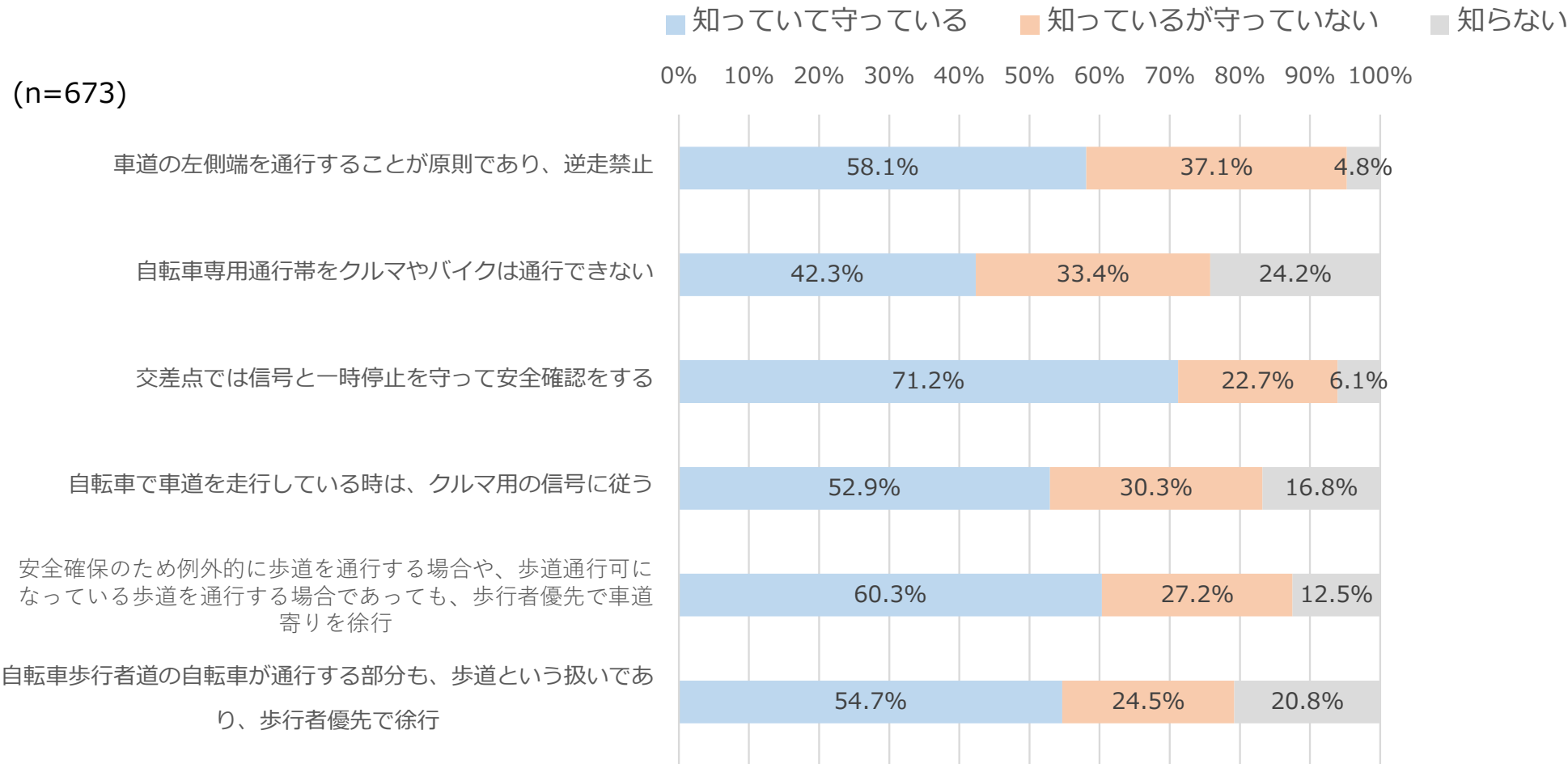
※2 自転車の利用の有無に係る質問で「使っている」と回答したにも関わらず利用頻度の質問に未回答のサンプル数を「頻度不明」としている。

前回（令和6年度第2回）協議会での主な意見と対応案

前回協議会での主な意見			対応案
項目		代表的な具体的意見	
1	計画の目標（成果指標）の評価の仕方	・年代別のアンケート回答割合と実際の人口構成比との間に乖離があることから、 <u>補正をかけて成果指標の達成状況を評価すべき。</u>	御意見を踏まえて <u>補正をかけた値により評価</u> する。 （対応案①参照）
2	計画の目標（成果指標）の評価に用いるデータの検討	・成果指標の「自転車の利用」について、アンケートの結果を用いるのではなく、 <u>信頼のおける統計値により設定することが望ましい。</u>	適当な統計値の設定が難しいため、アンケートの結果に <u>補正をかけた値により評価</u> する。 （対応案②参照）
3	年代別の自転車利用者の割合の算出方法	・自転車利用頻度のグラフで、「月4回未満」の割合が全ての年代で10％程度減っており、統計的に見て要因があると思われる。 <u>前回の調査票から回答の仕方（選択形式→数値入力形式）が変わったことでバイアスがかかっているのではないか。その結果、自転車利用者の割合も少なくなっているのであれば、別角度で考えたほうが良いのではないか。</u>	・設問バイアスの影響により、「月4回未満」の割合が減少した可能性が高いものの、利用頻度については、年度ごとに <u>概ね共通の算出方法であり回答の仕方の変更による影響は小さいことを確認</u> （確認結果①参照）
4	自転車に関する交通ルールへの遵守割合の算出し直し	・ルールを「知っているか」「守っているか」の質問において、 <u>自転車を使っていない人はルールを知っていても守れない</u> のではないか。	<u>自転車利用者に絞って遵守割合を算出</u> する。 （対応案③参照）

対応案③ 【自転車に関する交通ルールの遵守割合の算出し直し】

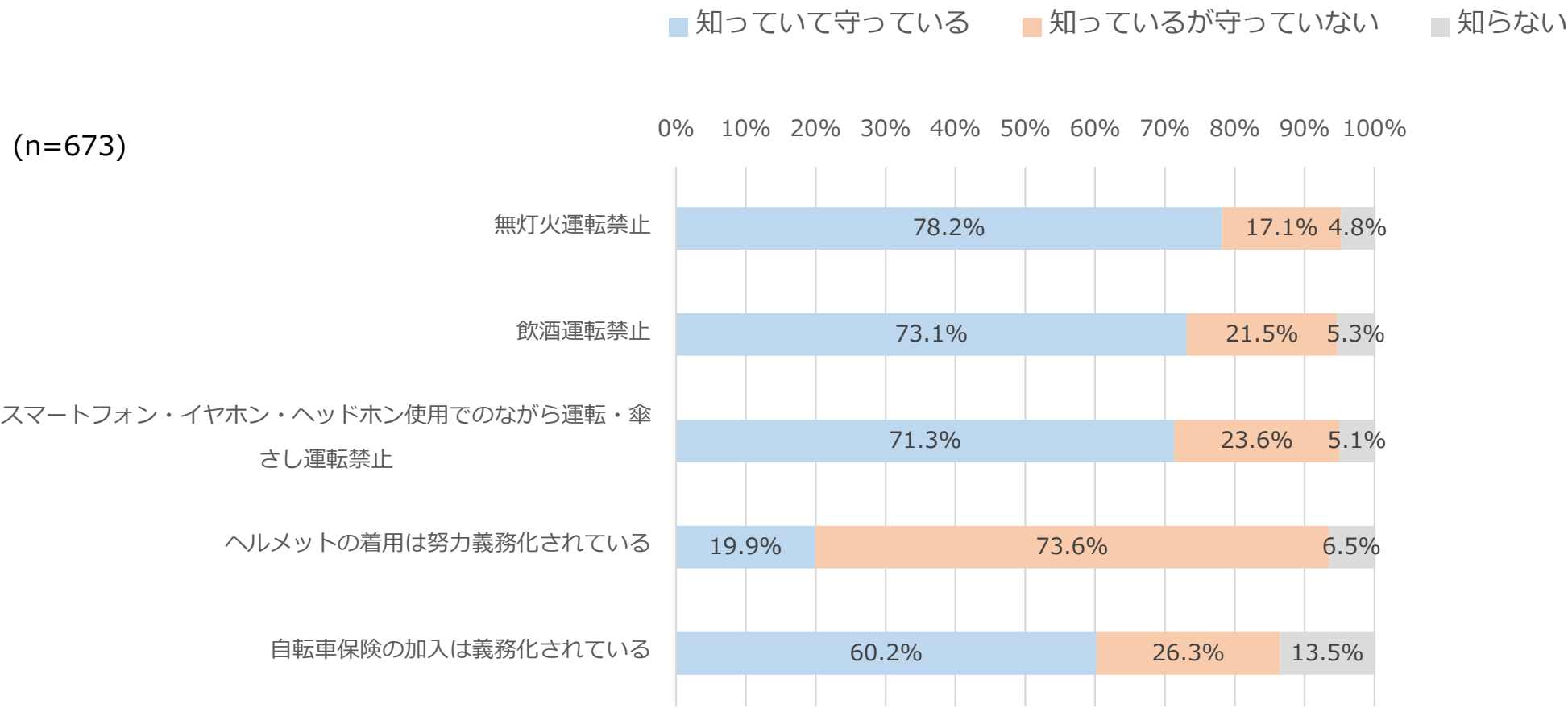
- アンケート回答者のうち自転車利用者に絞って自転車に関する交通ルールの遵守割合を算出し直した結果、ルールを「守っている人」の割合は増えたが、「守っていない人」も2～4割程度見られた。



<自転車利用者の自転車に関する交通ルールの認知・遵守状況>

対応案③ 【自転車に関する交通ルールの遵守割合の算出し直し】

- 特に、「ヘルメット着用の努力義務化」については、7割以上がルールを守っていない。



<自転車利用者の自転車に関する交通ルールの認知・遵守状況>